
遺された航跡(ラガルト × アイシャ)

ミニヤ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

遺された航跡（ラガルト×アイシャ）

【Nコード】

N1536B

【作者名】

ミニヤ

【あらすじ】

このSSはかわき茶様主催<かわき茶停>の掲示板より、ミニさん、ウホッ！さん、<Bランク軍師の戦術的ぶらり旅>の管理人であるYAIさんからの情報を元に作成しています。

——声が聞こえる。

自分の近くに・・・いや、やはりあれは風の音だとラガルトは思う。
ひどく心地いい・・・

「ラガルト。」

「ん？」

自分の名を呼ばれたので目を開けると、

はつきりとした視界に自分を見下ろしている若い男が目に入った。
少しだけ逆立っている茶色い髪、意志の強そうな茶色の目。

「マシューか。」

半身を起こして木に背をもたせると、ふわあつとあくびをする。

「こんな時に昼寝とは、暢気なもんだな。」

「べつにつに、仕事が無ければ暇なもんさ。」

それを聞いたマシューが少し呆れたような顔をしたが、
当のラガルト本人は全く気にした様子はない。

「そう言うお前さんは何か用か？」

「別に、通りかかっただけだ。」

「なあマシュー、時間があるなら一つ聞いていいか？」

「何だ？」

「以前、やけに黒い牙つて言葉に反応してたけど何かあったのかい？
まあ、大体想像はつくがな。」

マシューは何やら苦虫を噛み潰したような表情をしていたが、やが
て言った。

「・・・仲間が死んだ。正確に言えば牙の奴に殺された。」

「うゝん、なるほど。」

苦笑して頷いて、マシューの顔を探るように見つめる。

「もしかして、あんたの女かい？」

「・・・まあな。名前はレイラ。」

「レイラ？」

聞き覚えのある名前に、ラガルトが少し目を大きくする。

「赤毛の美人か？」

「？知ってるのか？」

ラガルトの思いがけない反応にマシユーが驚いた顔をする。

名前を出しても分からないだろうと思っていた男が、恋人の顔を知っている。とても不思議な気分だった。

「顔は見た事がある。」

そう言つて随分前にみかけた赤毛の女の顔と、彼女について聞いた話を思い出す。

「新人だけど手際がいいつて一目置かれていた。」

「・・・成る程ねえ、あんたの恋人だったのか。」

「お前は？アイシャ・・・だったか。どんな女だった？」

随分前に聞いたラガルトの話をふいに思い出して興味が湧いたのか、マシユーが探るような視線を向けてくる。

「恋人つて程親密じゃないさ。ま、あいつも美人だったが。」

ラガルトより二つ三つ年下の、意思の強そうな顔つきをした美しいサカの女。

五感がとても冴えた奴で仲間を大事にしていた、優しく慎重な性格だった。

「名前を聞く限り、サカ人のような気がするが・・・？」

ラガルトが頷く。

「そう、アイシャはサカの生まれだった。」

最初は俺一人が肅清者をやってたんだが、一人では荷が重いだろうつてんで首領が連れて来たんだ。」

義賊集団く黒い牙>

自分はベルンを本拠地としていた10年以上も前に素早さを買われて

（・・・と言っても当時のまだ、片手にも満たない集団に）仲間入りを許された。

今でこそその活動は各国へと広がっているが、設立当初の頃自分は数少ない仲間達と一緒に暗殺をしていた。もつとも、

自分達の狙いは悪徳商人や平民を虐げる強欲領主に限られてはいたのだが。

けれど、牙の人数が多くなるにつれて中には他の組織の者、あるいは賞金稼ぎに黒い牙の情報を売り渡そうとする者が出てきた。だから、そんな裏切り者をいち早く見つけ、始末する必要性が出てきたのだ。

そして、自分は自ら望んでその役を買って出た。俗に肅清者と言われる。

肅清者とは、言い方は違えど殺し屋の事である。

けれど、金を貰えば誰でも殺すと言うわけでは無く、一応自分なりに理念と思想に基づいた殺しを、裏で行なう人間の事を総称してそう呼ぶ。

そうして肅清者となってからいくらか時が流れたある日、首領であるブレンダン・リーダスに呼び出された。

「やあ、首領。」

「ラガルト、調子はどうだ？」

「んゝ、まあぼちぼち。」

「そうか。」

首領が呟いて、苦笑する。

「一人じゃ何かと負担が大きいだろ？」

だから相棒を用意した・・・と言っても一人だが。」

「そいつはいい。」

ラガルトは蔑むようににやりとした。

「一体そいつ、どんなヘマをやらかしたんだい？」

「お前が何と言おうと、もう、決めた事だ。」

問答無用か、と思っていると首領がその心の中を察したように苦笑した。

「彼女が望んだ事だ。」

「彼女？女か。」

首領が頷く。

「ああ。名前はアイシヤ。通り名は＜黒豹＞」

ラガルトの表情が少しだけ変わる。

「＜黒豹＞・・・あの事件の生き残りか。」

首領が頷く。

事件、と言っても表沙汰になるようなものではない。

しかし黒い牙にとっては事件と言っていていいものだった。

ある貴族を襲う計画だった。

だが計画を実行する牙の集団の中に裏切り者があり、

貴族に情報を流した奴がいた。

結果、大虐殺が行われた。だが何とか生き延びた者も僅かにいると

聞いた・・・

その内の一人か。

「ま、仲良くするんだな。話はそれだけだ。」

ラガルトはそれ以上尋ねようとしなかった。

頷いて自分の長い紫の髪を後ろに流して、くるりと踵を返す。

片手を上げて首領に了解の意を伝えて廊下に出た。

すると柱の影から一人の女が姿を現した。

・・・自分より二つ三つ若いだろう女。

かすかに風になびく程度の長さの、暗緑色の艶やかな髪、黒曜石のような瞳。

スツと鼻筋の通った美しい顔立ちとしなやかな体つきは豹・・・

と言っより獺を思わせる。

顔つきでサカの血が流れているとすぐに想像がつく。

何より草原の民独特の神秘的な雰囲気を漂わせている。

しかしその表情は無いに等しく、自分を見ても少しも揺らがない。

「あなたが疾風・・・」

彼女がかすかに呟く。

澄んだ、凜とした声が耳に残った。

「黒い牙もこの軍同様、色々な連中がいたんだろうな。」

ふと気付いたようにマシューが言う。自分たちの軍の面々は実に多彩だ。

リキア、オスティアの騎士から傭兵、エトルリアの公爵夫妻、姫君、ナバタの守り手。

密偵から暗殺者までいる。

「ああ。」

ラガルトが頷く。

「確かに俺達に生まれも素性も関係ねえ。」

そう言って笑う。

「アイシャが相棒になってからは、

あいつが弓を引いて俺はあいつの仕損じを始末していた。

随分仕事が楽になったもんだと思ったよ。そうそう、特にウハイの奴が、

同族は何たらかんたらってんでやたらと気を遣ってた。」

「ああ、あの男か。」

マシューは随分前に自分達の前に立ちはだかった黒い牙の一員、敵ながら勇ましかったサカの戦士を思い出した。

「気を遣う・・・？」

サカ人だから、と言う事だろうか。

敵ながら、リーダー兄弟やブレンダンがそのような差別を許すとは思えない。

マシューの疑問に気付いたようにラガルトが苦笑する。

「まあ、当然皆が皆仲良くしようって考えじゃねえ。

中にはあいつは女でサカ人だってんでたまにちょっかいを出そうと

した奴もいた。

もつとも返り討ちにされてたようだがね。

・・けど、肩身狭い思いはそれなりにしてただろう。特に利き腕を失ってからは・・な。」

ラガルトの声が、少し沈んだように感じた。

「そうか・・。何故、腕を失ったか聞いてもいいか？」

お前達牙にも杖が使える者がいただろうに。

「俺達組織の活動を外部に漏らした奴がいた。」

だから、俺とアイシャでそいつを追撃しに行った。

通り名はく天狗>手に装着した鉤爪と・・手榴弾を武器にする男だった。」

「そんな物を作る奴がいたのか？」

手榴弾と言えば、

火薬を扱うのに精通しているものがないと作るのは難しいと聞くのだが。

「ああ。たまたま火薬や劇薬の扱いに長けてる奴だったのさ。」

ラガルトが肩をすくめる。

「おまけに。」

そう言つて、自分の左目についている何かに引っかかれたような傷跡を指差す。

「ご丁寧にこの傷をつけてくれたのもそいつ。」

「成るほど・・。」

マシューはただ頷いた。

「こいつがまた結構強くてな。俺とあいつで追い詰めたんだが・・。」

「

アイシャが慎重に弓を引き、男に狙いを定める。

が、振り返った奴が何かを投げるような動作をした瞬間、

アイシャの右肩が火を吹いた。

「ああっ！！」

ラガルトは彼女の悲鳴と共に、

つがえていた弓と弓身が地面に落ちる音をかすかに聞いた。

だが彼女の方は見ず、男が次の動作に移る一瞬の隙に切り込んだ。

「！！」

不意を突かれた男がくそつと吐き捨て、

切り込んでくるラガルトの剣から逃れようとつさに飛び退ってかわす。

突然の回避にラガルトが小さく前のめりになる。

と、その隙を逃すまいと男が鉤爪で切りかかった。

ラガルトは素早く身体を引いたが奴の鉤爪が自分の左目のすぐ側をかすめた・・

と感じた直後僅かな痛みが走る。

相手が引いたのを見て男はにやりと笑うと、今度こそはと再度鉤爪で切りかかった。

キンッ！

二人の間に鋭い金属音とともに火花が散る。

完全に捕らえたと思ったのだが、と男がちつと舌打ちする。

ラガルトは自分の剣の鞘を使って巧みに鉤爪を受け止めていた。

男が怯んで出来た一瞬の隙を見つけると左足で蹴り込み、

右手に握った剣で左肩から相手の首の方へ向かって切り込んだ。

「がっ・・・」

思わぬ攻撃に一声呻いたその男は、首を押さえて逃れようとした。

押さえてる手の下からは血が流れており体勢が崩れかけていた。

ラガルトは間髪いれずに剣で男の胸を薙ぎ払う。

重い手応えの後、目の前が一瞬赤く染まった・・ように見えた。

次に見ると、男はもの言わぬ死体と化していた。

完全に息が止まっているのを確認し、死体の始末は後でするとして

腕を押さえ、

血を流して倒れている相棒の元へ駆け寄る。

「アイシャ！」

手榴弾を喰らった彼女の右腕は焼けただれ、一番酷い所からは骨が見えていた。

「ラ・・・ガ・・・」

「喋るな。」

彼女が何か言おうとするのを黙らせる。出血もひどい。とくにこの腕の傷・・・

ラガルトは自分のマントを切り裂くと、

その布を使って傷口より心臓に近い部分を縛り上げる。

近くにあった丈夫そうな木の枝を切り取って丁度良い長さに切ると結び目に通す。

そしてその棒を回転させて強く締め付けた。

それから彼女に自分の服をかけると体温が奪われないよう包み込む。火傷を負ったり、血液を失うと人間の身体は失った水分を補おうとする為喉が渴く。

だから携帯している水筒の蓋をとって飲ませた。

僅かな量しか無いが、無いよりはマシだろう。

「いいか、意識を失うなよ。奴の死体を始末して来るからな。」
彼女がだるそうに頷く。

すぐにでも医者に診せに行かなければあの火傷と出血量では命に関わるだろう。

・・・だが、自分達の本来の目的を忘れてはいけないのだ。

「それで、どうなったんだ？」

「奴が投げた手榴弾が運悪くあいつの利き腕に当たっちゃった。

出血もひどかったし、

おまけに手榴弾の破片があいつの腕の中に無数の破片を残しちゃってな・・・

結局、右肩から下は切り落とさないと駄目だった。」

マシューが痛ましそうな表情を浮かべる。

「そうか、それで利き腕が・・・よく腕だけで助かったな。」

「ま、俺の止血や腕に関する処置は素人にしては上出来だったことが幸いしたらしい。」

アジトに戻ればヤンじいしつつて結構腕のいい医者がいたからな。

まあ、ヤンじいが塩水であいつを救ったのには驚いたが・・・。」

「塩水？」

死体の始末をつけた後、

何とか意識を保っていた彼女を抱き抱えてアジトに戻ったラガルトは、

真っ先にある人物のいる部屋を目指した。

「ヤンじい！入るぞ！」

「何だどうした・・・」

ヤンじいが出て来ようとしていたのを半ば強引に押し込んで入り込み、

アイシヤを近くのベッドに寝かせる。

「！？アイシヤ・・・？」

驚いたように言う年配の男の名はヤン。

黒い牙の中では医者役割を受け持っている。

「ちよいとドジっちまってな。」

ラガルトが彼女にかけていた自分の上着を取ると、

アイシヤの服には乾きかけて茶色くなった血がべっとりついていた。

「こりゃひどい・・・すぐに手術だな。」

最もひどい傷のある右肩に目をやったヤンが、即座に準備に取り掛かる。

「おい。」

「ん？」

何に使うのか、あつと言う間に水で満たした大きい水瓶を二つ持ってきていた。

片方でお湯を沸かし始め、もう一方の冷たい方に塩を丁寧に量り、大きいスプーンで混ぜて溶かしながらヤンが話しかけてくる。

「お前その、目の傷は？」

「ああ、これか。」

水に映った自分の顔を見て、初めて傷がある事に気付く。

「かすんだり、黒い線が見える事は無いか？」

「ぜんぜん、大した事ないよ。」

「なら丁度いい機会だ、お前も手伝え。」

怪我の周辺だけでいいから、彼女の身体についてる血や汚れを拭け。

「
そう言つて、

お湯を沸かしていたもう一方の鍋から温かさの残る布を絞って放り投げてきた。

「はあ？」

「時間が無いんだ、手伝いぐらいしろ。」

「・・・・。」

思わずアイシャを見るが、彼女は弱々しく頷いただけだった。

確かに時間は無い。

そう自分に言い聞かせて軽く彼女の服をずらすと手早く泥と血を拭きに取り掛かる。

彼女の肌には・・・少ししか見えなかったが痛々しい赤い線がついていた。

随分前に受けた傷のようだが、おそらくあの事件の時に負ったのだろう。

その間、彼女は大人しく目を閉じていた。

「アイシャ、少しの間だけ辛抱しろよ。」

ヤンの声がすぐ近くでしたので振り返ると、

彼は羽軸と動物の膀胱を組み合わせたものと、

塩水を入れた方の水瓶を持っていた。

「おいおい、そんなに何するつもりだ？」

「見て分らんか。この水を血に流すんだ。」

「！ただの薄い塩水だろーが！そんなん入れてこいつに何かあったら・・・。」

「本当なら人間の血液を直接送る方がいいんだが、時間が無いから仕方ないだろう。黙って見ておれ。」

「・・・。」

「聞いた事がある。」

何かを考え込むようにマシューが言う。

「船に起きた何かの事故で怪我をして、

失血死しかけた船乗りを医者が海水を薄めた水を血に流し込んで、延命に成功したとか何とか・・・。」

ラガルトが頷く。

「ああ、それと同じ原理だ。当時はさすがにびびったが。」

「それから彼女はどうなったんだ？」

「何度か様子を見に行こうとしたんだが、こっちも仕事があったんでね。」

次に会えたのはしばらく経ってからさ。」

「ラガルト。」

アイシャが自分を見てベッドの上に半身を起こす。

やはり、彼女の身体に右腕は存在しなかった。

「よお、具合はどうだい？寝てないでいいのか？」

「平気、動かない方が辛いのに。」

「そっか・・・なら、いーけど。」

そう言いながら近寄り彼女のベッドに腰掛ける。

「ありがとう。」

「は？」

「助けてくれたでしょう。」

「別にいいって。」

「・・・ごめんなさい。」

アイシャが残った方の左手で、ラガルトの左目の傷にそつと触れた。

「目に傷を・・・」

「なかなか似合ってるだろ？」

笑って、冗談っぽく受け流す。事実、視力に影響はない。

・・・お前に比べれば無いに等しい。

「辛いかな。」

聞くと、彼女が自分をじつと見つめてきた。

「大丈夫。」

そう言って微笑む。

力ない笑顔が痛々しい。

「ガラにもなく落ち込んでる事を隠そうとするもんだから、ほっとけなくなっちゃってな。まあ色々と様子を見に行った。」
実際、それからのラガルトは、暇さえあればアイシャの様子を見に行った。

傷がある程度塞がり、抜糸してからの彼女の回復は早かったが、しばらく寝たままになっていたせいもあって体力も衰えていた。何より利き腕を失った代償は大きい。

今まで当然のように出来ていた事が出来なくなるのだから、精神的なダメージもかなりのものだろう。

「へえ、お前が？どんな事をやったんだ？」

そう言う事は面倒だからとしなさそうな男なのに、とマシューは思う。

それだけ彼女が大事と言う事か。

「最初、関節を動かさずに筋肉を動かすように・・布団の中で全身の伸びをさせたりするんだ。

切断・離断端の皮膚の強化訓練として手や小枕などで断端を叩いたり、

断端を砂嚢のような固い枕で圧迫し刺激したりさ。

後は、包帯の取替えとか。」

「へえ。」

「痛むか？」

包帯を巻きなおしながら彼女に聞く。

「平気。」

アイシャが素直に頷く。少し前まで腕が残っているような気がする、痛みを感じると言って訴えて来るのでどうしたものかと思ったのだが。

ヤンじいによるとそれは幻肢と言うもので、

手術でなくなっているはずの手が残っているような感覚なのだそうだ。

幻の手にしびれや痛みを感じる場合を幻肢痛と言い、

幻肢や幻肢痛は手術後におこる正常の反応らしい。

訓練が進めば消えるようで、事実、しばらくしてから痛みを訴えなくなった。

関節が固まっておこる関節の拘縮を予防する為。

そしてむくみを予防し、

切断部位を形よく整えるために切断・離断端に包帯を巻いてやる。

これには血液循環をよくする効果があるらしい。

定期的に包帯を巻きなおし、身体を楽な姿勢に保ってやる。

「仕事はいいの？」

「あつたら来ねえさ。」

答えてやると確かにそうね、とアイシャが笑う。

いつの間にか時間があるときは彼女の包帯を巻きなおしてやつたり、片腕の訓練に付き合うのが日課となっていた。

おかげで随分ロイドや・・特にライナスにからかわれもしたのだ。

片腕の訓練とは、残った方の左手で色鉛筆を持って色を塗ったり線を引いたり、

あるいはスプーンを使い皿に入れた豆をすくうものである。

さらには左手で箸を使ったり、字を書く訓練へと進めて行く。

だんだん小さな文字や細かい動きへと難しくしたが、

彼女は更に根気強く1日3、4時間も練習し続け、

やがては左手でも右手で書いたのと同じくらいの字になった。

けれど食事に関して言えば右手で茶碗を支えることができないので、ラガルトがいれば彼が手伝う。

上手に出来ずこぼしてしまうこともあったが、

力の入れ具合も調節出来るようになった。

「お前って案外面倒見がいいんだな。」

マシユーが感心したように頷く。

殺伐とした暗殺集団と言うイメージが急に薄くなった気がした。

「別に。失ったら補えばいいのさ。他の感覚や道具や、周囲の人間でな。」

「ああ。」

「自由に動けるようになってからのあいつは。」

言って、太い木の枝を指差す。

「時々ああ言う木の枝の上や岩の上に座って・・

残った方の左腕で琴を弾いて、歌を歌うようになった。」

それからどこか遠くを見る目つきになる。

「歌を歌う奴ってのは大概風や・・水みたいにも流れていくもんだ、歌を残してさ。」

あんたがその歌を知っていればいいのに。・・俺はもう忘れちまっ

た。」

何かの楽器のかすかな音と共に、高く低く、澄んだ美しい歌声がどこからか聞こえて来る。

「歌・・・？」

「ラガルトか。」

後ろから聞きなれた声がして、振り返る。

「おや、ウハイ。」

「アイシャがまた、歌っている。」

「へえ、いい声じゃないか。あいつが歌を歌うとはな。」

「アイシャが歌っている歌は、サカに古くから伝わる唄。」

・遠くにいる人々と大地を想う唄だ。」

ウハイが何やら複雑そうにため息をつく。

「腕を失ってから、よくあの唄を歌う。」

「ふゝん。」

「我らの教えにこんな言葉がある。人は、二つのものに断ち切れない絆を持つと。」

「へえ？」

「一つは自分を作った人。何か分かるか？」

「両親って事だろ。」

「そうだ。」

ウハイが一つ頷く。

「もう一つは、自分が生まれた大地。」

「生まれた国って事か。」

もう一度、ウハイが頷く。

「なるほどね。なら、お前は？」

「何だ。」

「たまに、草原に帰りたくなったりするのかい？」

「・・・ごく、たまに。」

やっぱりそんなもんかねと笑って言って、ラガルトは彼と別れた。そして次に向かったのはアイシャの所。

「よ、アイシャ。」

「ラガルト。」

近寄って、彼女の隣に腰を下ろす。

「さっきの歌、お前が？」

「ええ。」

聞くと、一つ彼女が頷く。

「その琴はどうしたんだ。」

彼女が大事そうに持っている琴を指差す。

「ウハイがくれたわ。大分色々な事が出来るようになったのだから、これを使って何か弾いて歌ってみろって。」

ウハイがねえ、と普段余り喋ろうとしない彼の顔を思い浮かべる。あいつなりの気遣いだったに違いない。

「歌が好きか。」

「ええ。歌はいい・聴くものも、歌うものも和ませてくれるから。」

「そうか。ま、確かにいい声だ。」

ウハイから聞いたが、さっきの歌は遠くにいる人や故郷を思ふ歌なんだってな。」

「・・・。」

ラガルトの目を見つめたアイシャの瞳の中に、一瞬何かが浮かんたように見えた。

「そいつはお前の夢語りかい？アイシャ。」

だが、彼女は何も言わないで顔を逸らした。一度、琴の弦を軽く弾いた。

「琴と歌・・・か。」

「ん？」

「いや、何でもない。

ソーニヤが・・・あの女が来なければ、彼女は死なずに済んだんだな。腕を失う事は避けられないにしてもさ。」

「まあ、そゝゆゝ事だ。」

ラガルトが苦笑する。

「それからはお前さんに話した通り。」

首領の後妻ソーニヤ、彼女と共に来た得体の知れない薄気味悪い連中。

その変化は緩やかに訪れた。

最初の違和感は光を失った男を殺した時に感じたのだったか。

粛清者である自分の対象が「裏切り者」あるいは「裏切ろうとする者」

に加えて「暗殺者として役に立たないもの」が含まれ始めたのは。粛清者に殺せと命令するまでには幾つか段階がある。

もちろんその段階を飛ばす事も多々あるが。

けれど通常は予め裏切りそうな奴に目星をつけ、更にそいつを見張る監視役がつけられる。

監視役は逐一目星をつけた奴の行動を監視し上の連中に報告する。

光を失っていて他人を傷つける事は不可能に近いと思っても、わざわざ粛清者である自分に殺せと命令が来た以上、

その男は何らかの形で組織を危険に晒す存在だと

上の連中が判断したのだ。だから従うのみ・・・なのだが。

失った片腕・・・ふと、相棒の姿を思い浮かべたがすぐに振り払う。今はまだ・・・多分。

だがそんな矢先、見知らぬ男が自分の元へ指令を持ってきた。

夜。

ゆっくりと命令された標的のいる部屋に向かって歩いて行き、

気配を殺して中に入る。

標的はと言うと、ベッドに腰掛けドアに背を向ける形で外を眺めていた。

ベッドの側にある大きな窓からは美しい満月が見え、

その光に照らされて暗緑色にも見える標的の・・

少し伸びた標的の黒髪が艶やかに光る。と、そいつが振り返った。

間違える筈はない。自分の相棒。

「月が綺麗だ。」

「そうね。」

「殺さないの？」

焦った様子も全くなく彼女が静かに尋ねてきた。やはり気付いていたか、と思う。

「・・苦しまないようにしてやるさ。」

ラガルトが右手に持っている短剣を握りなおしてそう言と、

彼女は無言でベッドから立ち上がりラガルトの方を向くと静かに目を閉じた。

次の瞬間、ラガルトは彼女を固く固く抱きしめる。

彼女は少し驚いたようだが、

彼女の腕もまた自分の背に回され力が込められたのを感じた。

それは、お互い相手に自分の心を通わそうとしていた。

やがてラガルトが目を開け、自分の右腕に握られている短剣を見つめる。

苦しまないように、

断末魔の声をなるべく聞かない様にする為に、

背後からゆっくりかつ慎重に狙いを定め・・

一気に刃を突き立てた。

人を刺す時独特の重い、異様な手応えが伝わり、耳元でう・・と小さく呻く声がした。

彼女を抱きしめているこの状態なら、

苦悶の表情を見ないで済むのがせめてもの救いか。

「ラ・・ガる・・と・・。」

耳の中に、切れ切れに彼女の声が入って来る。

「スキ・・。」

直後、自分の背に回された彼女の腕がだらんと落ちたのを感じた。
急いで彼女の顔を見つめるが、もう彼女は息をしていない。

けれどどうしてとこんなに、と疑問に思うぐらい彼女の表情は穏やかだ。

どこも見ていない、それでいて開いたままの両目を閉じてやり、唇から垂れている血の筋を拭ってやる。

もう一度相棒の身体を抱き締めると、しばらくその場で硬直していた。
ただ、酷い虚無感だけがあった。

「どこかの村で、誰かと平和に暮らす・・だったか？」
マシューの言葉にはっとする。

「ああ、そんな事言ったかな。」

「本当は、お前が望んでたんじゃないのか。」

どこかで狂わなければ、現実になっっていたかもしれない・・
失わなくて済んだかもしれない幸せな日々の事を。

ラガルトは一瞬きよとしたが、すぐにいつもの表情になりくつと笑った。

「俺が？お前さん、意外とロマンチストだったんだな。くくつ。」

「笑うな。・・けど、やっぱりアイシャさん幸せだったと思うぜ。
そんなに大事にしてくれた相棒がいてさ。」

決まり悪そうにマシューが頭を掻くのを見て、ラガルトはふつと笑んだ。

「やっぱり密偵にしとくのは勿体ないね。」

牧師にでもなつたらどうだい？向いてると思うけど。」

「・・・ついでに、もう一つ言っていていいか？」

「ん？」

「さっきお前に話しかける前、

寝てるあんたを見つめてる女が一瞬だけ見えたんだよな。

黒髪でさ・・・俺を見て消えたけど、笑ってた。」

ラガルトがおどけて見せる。

「へえ、そりゃびつくりだ。」

「俺にとつちや誰でもいいがな。じゃあ、もう行くぞ。」

「ああ。」

踵を返したマシューに向けて軽く手を振った後、

ラガルトはさつきと同じく背後の木に寄りかかった。

額当てをずらして目を隠し耳を澄ませる。

そうして聞こえるのは、近くの木々のざわめきのみ。

「・・・アイシャ・・・。」

ラガルトがどこへともなく呟いた言葉を、風が静かに攫って行った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1536b/>

遺された航跡(ラガルト×アイシャ)

2010年10月12日14時27分発行